

○千葉 清, 石橋 薫, 工藤 啓吾,
藤岡 幸雄, 竹下 信義*, 鈴木 鍾美*

○守口 憲三, 緒方 邦敏, 前田 光義,
村井 竹雄, 平 孝清*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座
岩手医科大学歯学部口腔生理学講座*

乳頭腫は、一般に単発性、孤立性であるが、稀に粘膜を広範囲におかす多発性、融合性のものが報告されている。このような Florid 型の乳頭腫を1960年、Rock と Fisher は Oral florid papillomatosis と命名し、欧米で約10例、本邦で2例のみの報告をみるきわめて稀な疾患である。今回、われわれは本症を治験する機会を得たので報告した。

症例：73歳 女性。初診：昭和52年6月30日、家族歴：特になし。既往歴：10年前心臓病に罹患、現病歴：約3カ月前、左側頬粘膜に小指頭大の腫瘤に気づいた。疼痛ないため放置していたが徐々に増大するため、某医院で切除した。しかし、再び同部に同様の腫瘤を認めたため当科を受診した。現症：口腔内は上下とも無歯顎で、左側臼後三角から頬粘膜、上顎結節にかけて32×12mmの分葉状、花キャベツ状腫瘤を認め、表面は白色を呈し、一部は発赤していた。また義歯は腫瘤に接し、刺激していた。臨床的に癌を疑い Biopsy を行った。病理組織所見：腫瘤は凹凸不正で外葉性増殖を呈し、表面は parakeratosis を示し、空胞状と化している。また強い acanthosis がみられる。棘細胞層においては程度の異なった角化、角質変性、細胞間隙の拡大、細胞間橋の崩壊および円形細胞の浸潤が認められる。また基底細胞がやや異型性を呈し、その直下にリンパ球を主とする円形細胞浸潤が認められる。以上より Oral florid papillomatosis と診断した。処置および経過：BLM 5mg を1日1回静注し、週30mgの連日投与を行った。BLM 25mg投与時、腫瘤は著明に縮小平坦化し、BLM 60mg投与時点で上顎結節や頬粘膜の一部に残遺する程度ではほぼ完全に消失した。しかし、BLMの副作用と思われる貧血、発熱、倦怠感がみられたため、BLM投与を中止し、残遺腫瘤に90秒1回の凍結療法を行い治癒したが、再び同様の白斑をみたため、90秒2回の反復凍結を行った。凍結約21日後に軽度に変質化し治癒した。経過は良好である。

演題5 同時点火式歯科用X線装置使用による短時間照射における注意

歯科用X線装置には先点火式と同時点火式のものがあり、現在歯科臨床の大多数のものは後者のものである。同時点火式のもの、フィラメントの温度が一定になるのに多少の時間がかかり、この時間はX線強度が低くフィルムに対する感光作用を期待できない。この不感時間とも言うべきものの存在とその長さを知る必要があると考え、今回同時点火式歯科用X線装置について実験を試み、その結果について報告し、小児、幼児に対する短時間照射の注意などを述べる。

実験方法、用いた実験装置は、X線照射により蛍光板に発生するパルス蛍光を光電子増倍管に受けて電流に変える部分、光電管に与える高圧電源 (Kepco Regulated DC supply)、オシロスコープ (Iwatsu dual beam synchroscope)、記録装置 (横河, electro magnetic oscillograph)、等である。蛍光板は線源より約20cmとし、タイマ作動開始からの電源パルスとパルス蛍光の強さの変化と数を2チャンネルで同時記録した。X線発生装置はA社1種、P社2種、S社1種の計4種である。

成績、A社は0.2秒、P社65は0.22秒、P社50は0.18秒、S社0.16秒不感時間があつた。

結論 1. 同時点火式の歯科用X線装置は照射X線の強度が一定となるためには少なくともタイマ作動後0.1秒以上の不感時間がみとめられる。この不感時間は、小児、幼児等の短時間撮影においては、タイマ示度時間内で照射終了と考えられないので注意をする必要がある。2. 同時点火方式では、電源電圧の降下はさらに一定強度のX線発生までの不感時間を増す事も考えねばならない。

質問：石川 富士郎 (矯正)

すでに「一般に広く使用されている歯科用X線装置使用上の注意とデンタルフィルムの感度表示について」みちのく歯学誌6巻2号38~39, 1975年に村井先生がご発表の所見と比べ如何でしょうか。

本日も臨床医家の会員もおいでですのでこの辺も含めて村井先生からコメントを下さると幸いです。

回答：村井 竹雄 (歯科放射線)

本研究は放射線防護の1つに役立てたいというのが目的で行われたものである。一般臨床家が利用してい

る歯科用X線装置の大部分が同時点火式で、これは装置の構造から0.3秒以下の撮影時間では線量と照射時間の間に直線関係が得られず、必ず少い線量となる。電源電圧が低いとこの傾向は強くなるので0.3秒以下の撮影には以上の特性を知って装置を利用してほしい。

演題6 Str. mutans の分離培地の検討

○ 本田 寿子, 田近 志保子, 平田 佳子,
金子 克

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

Str. mutans の分離は通常 MS 培地, Gold 培地などで行われているが, MS, Gold 両培地における Str. mutans コロニーは他の連鎖球菌と類似しており, しばしば判別が困難な場合がある。こうしたことから, 誰にでも容易に Str. mutans の分離が可能な培地の必要性を感じていた。

今回, Harald らの発表した Str. mutans の分離培地である MSFA 培地, さらに改良を加えて培地をつくり, 標準株と健康人の歯垢4例を用いて検討を行った。

MSFA 培地は Mannit, Sorbit 2つの糖と Fuchsin を含む培地で, この培地上で Str. mutans が増殖すると赤〜ピンク色のコロニーを形成し, 他の連鎖球菌とは明瞭に区別できる。しかし, MSFA 培地に歯垢を培養した場合, 培養72時間経過すると, コロニーの特異的な色調が失われる現象が見られたが, これに Tryptone を加えて改良した MSFA 改良培地ではこうした欠点はなく, 特異的な赤, ピンクの色調を帯びたコロニーが観察された。

Str. mutans は MSFA 培地, MSFA 改良培地でも MS 培地と同様, よく発育する。

4例の歯垢を用い, MS 培地, MSFA 培地, MSFA 改良培地に培養し, そのコロニーの形, 色調から, Str. mutans と思われるものについて生物学的性状をしらべた結果, Str. mutans と同定できたのは MS 培地で60%, MSFA 培地で82.7%, MSFA 改良培地で93%となり, 特に MSFA 改良培地では MS 培地に比較して30%も高い分離率を示した。

改良培地の N₂ 源の種類と量, Fuchsin が最適かどうか, さらに多数の歯垢を用い, 検討していきたい。

質 問: 飯島 洋一(口腔衛生)

培地に N₂ 源としてアンモニアを応用してはいないのか。ないとすればぜひ, アンモニアによる実験を検討していただきたい。

質 問: 長門 孝次(医生化)

MSFA-Ⅱにおけるトリプトファン添加について, 特にS-ミュータンスにおける metabolic な面での検討について。

S-ミュータンスには特異的な Tryptophan 代謝経路を有しているのですか。

回 答: 本田 寿子(口腔微生物)

① S. mutans の特異的な性質を指標にした分離培地では Gold 培地の一つある訳ですが, これは Sucrose を高濃度を含み, Sucrose の存在下で S. mutans が壁固着, 凝集する性質からくる, ゴツゴツした特異的なコロニーをつくります。

② 添加した Tryptone は代謝の検討から選んだものではなく, この培地は糖分解能を指標にするものなので, 加える N₂ 源についても, 他の糖を含まないものということで, 糖分解用培地の基礎培地から選びました。

③ 飯島先生へ

検討したいと思います。

演題7 Str. mutans の菌体凝集能について

○ 田近 志保子, 本田 寿子, 平田 佳子,
金子 克

岩手医大歯学部口腔微生物学講座

Str. mutans の分離菌株の C type 98株の菌体凝集反応を調べたところ, 約10%に菌体凝集能を欠いた菌株が見つかった。また, 凝集反応用培地の検討もあわせて報告した。

従来から凝集反応用として用いられている Gibbons の培地に培養したところ, 菌株間の発育に大きな差があり, 各々の発育に応じて濃縮しなければならぬという繁雑さが生じたが, 血球凝集反応用として用いられている Rölla の培地を使用したところ, すべての菌株において安定した発育がみられた。この培地で培養した菌を用いて菌体凝集反応を行ったところ, Gibbons の培地で行った時と同じ結果が得られたので, 菌体濃縮などの繁雑な操作のはぶける Rölla の培地が